自己に向いた注意の硬着性と抑うつとの関係

坂 本 真 士¹

THE RELATIONSHIP BETWEEN RIGIDITY OF SELF-FOCUSED ATTENTION AND DEPRESSION

Shinji SAKAMOTO

The self-focus theory of depression (Ingram, 1990) predicts that the depressives remain self-focused when the external environment changed as compared with the nondepressives. Fifty-three male students participated in the following experiment. They were administered a self-rating depressive scale. About half of the subjects were heightened self-focused attention whereas the other half of the subjects were not. All subjects were instructed to solve tasks that required much attention. The results generally supported the hypothesis : (a) among subjects who were heightened self-focused attention, the depressives solved less tasks than the nondepressives ; and (b) during the task-solving, the depressives focused more attention on themselves than the nondepressives did. On the other hand, among the subjects not showing heightened self-focused attention, the above mentioned differences were not found. The role of the self-focused attention in maintenance of depression was discussed.

Key words : mild depression, self-focused attention concentration, shift of attention.

問 題

最近、抑うつの心理的諸現象を包括的に説明するものとして、自己注目 (self-focus) が考えられている (例 ; Ingram, 1990 ; Smith & Greenberg, 1981)。自己注目とは、自覚状態 (人が自分自身の方へ注意を向け自らが自らを注目の的としている状態) と自己意識特性 (自分自身に注意を向けやすい性格特性) との両方を含む用語である (押見, 1990)。注意を向ける自己は、容姿・振舞いといった観察可能な公的側面と、感情・動機・思考といった外からの観察が不可能な私的側面とに分けることができるが、抑うつとの関連で論じられる場合、先行研究では私的自己への注目だけが取り上げられているので、本論文でもこれにならうことにする。自己注目は、自己理解の促進や動機づけなどの肯定的な効果をもたらすが (レ

ビューとして、押見, 1990)、その一方で抑うつとの関連性も指摘されている。すでに、私的自己意識尺度 (Fenigstein, Scheier, & Buss, 1975 ; 押見・渡辺・石川, 1986) と種々の抑うつ尺度 (Beck, Ward, Mendelson, Mock, & Erbaugh, 1961 ; Zung, 1965) との間に、有意な相関が報告されている (Ingram, Lumry, Cruet, & Sieber, 1987 ; Ingram & Smith, 1984 ; 坂本, 1992 ; Smith & Greenberg, 1981 ; Smith, Ingram, & Ross, 1985)。また、私的自己意識特性が高い人や操作によって私的自覚状態を高められた人と、抑うつ的な人との間に類似の現象が報告され、抑うつが自己注目によって媒介されている可能性を示唆している (レビューとして、Ingram, 1990 ; Pyszczynski & Greenberg, 1987)。

さらに、抑うつと自己注目との関係を直接扱った研究もなされている (例 ; Gibbons, Smith, Ingram, Pearce, Brehm, & Schroeder, 1985 ; Mikulincer, Gerber, & Weisenberg, 1990 ; Pyszczynski, Hamilton, Herring, & Greenberg, 1989, Pyszczynski, Holt, & Greenberg, 1987)。これらの研究では、

¹ 東京大学社会学研究科 (University of Tokyo)

鏡などを使って自己注目状態を惹起し、その後の認知、行動、感情の変化を抑うつ者と非抑うつ者とで比較しているものが多い。例えば、Pyszczynski, Holt, & Greenberg (1987, 第2実験) は、自己注目が期待に及ばず効果を調べた。自己注目状態で、非抑うつ者は将来に対し利己的な期待、すなわち否定的な出来事は他者よりも自分に生じにくいという評価をしたが、抑うつ者にはこのような利己的な期待は見られず、否定的な出来事は自分にも他者にも同じように生じると報告した。また、Gibbons et al. (1985, 第2実験) は、うつ病患者と非精神病の入院患者に対して自己注目の効果を調べた。うつ病患者は非精神病入院患者に比べて、自己注目によって否定的な感情を増大させた。これらの研究は、同じ自己注目の操作をしても、抑うつ者と非抑うつ者とでその後の認知的処理が異なる可能性を示唆している。

抑うつと自己注目との関係を扱ったモデルも提起されている (Ingram, 1990 ; Lewinsohn, Hoberman, Teri, & Haulinger, 1985 ; Pyszczynski & Greenberg, 1987)。Lewinsohn et al. (1985) のモデルは、抑うつが発生と維持に果たす自己注目の役割を示唆した最初のモデルであり、Pyszczynski & Greenberg (1987) のモデルでは、抑うつ的自己注目スタイルという概念を提唱している。Ingram (1990) のモデルは、情報処理的な観点に立ったモデルであり、その中で彼は、自己注目の頻度だけでなく、自己注目の持続も抑うつが発生や維持に関連している可能性を示唆している。すなわち自己に向けた注意を、状況の要請にしたがって適切に外(課題や状況)に向けられないことが、抑うつが発生や維持に関連していると思われる。しかし、この可能性についてはまだ実証的研究がほとんどなされていない。そこで本研究では、抑うつ者と非抑うつ者とで自己に向けた注意の移行の違いについて調べる。すなわち、自己に注意を向けた後、課題に注意を向ける状況で、どの程度課題に注意をスムーズに移行できるかを、学生のうち、抑うつ傾向の高い者 (mild depressives) と低い者とで比較する。

自己注目後に集中力を必要とする課題をさせると、抑うつ者は非抑うつ者よりも課題に注意を移すことが難しいため課題遂行が劣るだろう(仮説1)。また、自己注目後の課題注目状態で、抑うつ者は非抑うつ者よりも自己に注意を向けている程度が高いだろう(仮説2)。

方 法

実験計画 抑うつ(高・低)×自己注目(有・無)の2要

因とし、いずれも被験者間要因とした。実験はすべて個別に実施された。

被験者 男子大学生53名。いずれも都内のある大学の一般教養の心理学の講義を受講する者で、被験者登録をしたものの中から実験者がランダムに選んで電話し、実験協力の合意を得た者である。全参加者53名のうち、28名が自己注目あり条件に、25名が自己注目なし条件に割り当てられた。

手続 被験者は個別に実験室に案内された。被験者にはまず、当日行う実験の概略が実験者から説明された。被験者には、実験者自身の実験(自己開示実験という名目)の他に、大学のプロジェクト研究への協力が求められた。大学のプロジェクト研究への協力とは、健康調査表(実は抑うつ尺度)への回答と現在開発中のテスト(実は向けられる注意を測定するための課題)の遂行である。まず最初に健康調査表とその回答用紙であるマークシートが配られ、即座に回答が求められた。回答終了後、健康調査表とマークシートは回収され、その後被験者は開発中のテストのやり方についての説明を受けた。説明を受けた後、被験者は、テストをする時間は別に設けてあると言われ、自己開示過程の説明を受けた。被験者は、自己開示についての全般的な説明を受けた後、自己開示過程の研究ということで、他の大学の男子学生とこれから会って話しをしてもらうこと、詳しい手続は2人の学生が揃ってから述べられることを教示された。ここで自己注目の操作が入った。自己注目あり条件の被験者は、自己開示に先だって自分自身についてよく考えて頂きたいと告げられ、自分自身の内面について考えるために6分間与えられた。この際、被験者は、自己注目の作業に使う回答用紙を渡され、それに自分の内面について考えて記述した。この回答用紙は自己注目の作業終了後も回収せず、その後の課題に注意を向ける状況でも被験者の目の届くところに残しておいた。自己注目の作業が終了後、次の段階に入った。一方、自己注目なし条件の被験者にはこのような作業は行われず、すぐに次の段階に入った。次の段階で、実験者は、自己開示実験の相手である学生のところへ説明にいくために実験室を出ることを被験者に告げた。4、5分かかるので、この間に先に説明した開発中のテストをやってもらいたいこと、開発中の試験的な実施でもあり真剣に取り組んで欲しいことが、被験者に教示された。課題の開始を告げた後実験者は実験室を出るが、被験者が課題を始めてから3分経過するところに実験室に戻り、課題開始後3分で被験者の課題遂行を中断し、すぐに事後質問紙を配布し

回答を求めた。最後に被験者に対してデブリーフィングを行い、謝礼を渡して実験が終了した。実験に要した時間は40分程度であった。

抑うつ尺度 抑うつ尺度としては、Zung (1965) の作成した SDS (Self-rating Depression Scale) の日本語版 (福田・小林, 1973) を用いた。SDS は20項目からなる尺度で、各項目に対し“ほとんどない”から“ほとんどいつもある”までの4点尺度(1-4)で回答するものである。実験と SDS との関係を感じられないようにするために、本実験では、“健康調査表”として実施した。また大量にデータを集めていることを強調するために、回答に際してマークシートを用いた。

自己注目の操作 自己注目の作業は、Who Am I テスト (Kuhn & McPartland, 1954) に類似の方法で、“私はどんな人間だろうか”という問いに対して10通りの違った回答をさせるというものである。但し、私的自覚状態を高めるため、ここでの問いは自分の内面に關する問いであり、自分の外面(容姿、服装など)や社会的側面(血縁関係、所属など)については答えないように強調した。10通りの違った回答をした後、全体として見ると“私”はどんな人間か尋ねた。人によって自己注目の程度が極端に異なることを避けるため、回答時間は6分間に制限した。途中、回答の遅い被験者には早く記述するよう促し、制限時間前に回答を終えた被験者には再度見直すよう教示して、自己注目の程度が被験者間で揃うように留意した。なお、自己注目の作業で用いた教示文は古沢・星野 (1962) を参考にした。本実験では、自己注目の作業として自分の内面について考えさせるという方法をとったが、これに類似した自己注目導入の方法としては、1人称代名詞を使って文章を書かせる (Fenigstein & Levine, 1984)、内省させる (Ellis & Holmes, 1982) がある。いずれも自分というものについて考えるという作業が要求されるが、この作業は私的自覚状態の定義(人から見えない自分の私的側面に注意を向ける)とも一致し、また私的自己意識尺度の項目(例えば、押見ら (1986) の尺度では、項目番号 6, 16, 28) とも符合するものである。

注意測定課題 注意を測定するための課題としては、労働省編一般職業適性検査 (1987) の中から検査10 (形態照合検査) を用いることにした。検査10は、42個の図形がそれぞれ左右にバラバラに散らばっており、右ページの図形と全く同じ図形を左ページから見つけ、その番号を回答欄に記入するというものである。この検査は形態知覚の能力を測定しているものであるが、課題の解決には線の太さや長さなど細かい差異を弁別

することを必要とし、課題解決には比較的集中力を要する。なお、開発中のテストであることをよそおうために、同適性検査の検査12の一部も付け加えた。

事後質問紙 事後質問紙では、(a)注意測定課題遂行中の私的自覚状態、(b)注意測定課題遂行中の被験者の注意の方向(どのようなことを考えていたか)、(c)自己開示実験予告の効果、について質問した。(a)は、注意測定課題遂行中の自覚状態を測定するためのもので、私的自己意識尺度の状態版ともいえるものである (Sedikides, 1992)。押見ら (1986) の私的自己意識尺度の言い回しを一部改変して、私的自覚状態を測定できるようにした。私的自己意識尺度と同様、全部で9項目からなっていた。具体的な項目の内容を TABLE 1 に示した。(b)は、注意測定課題遂行中に被験者の注意が自己、課題の解決、課題解決以外の外的対象、のいずれに向いていたかを測定するものである。被験者は、注意測定課題遂行中にどのようなことを考えていたかという質問に対し、自由記述で回答した。(c)は、自己開示実験(見知らぬ学生と会うこと)の予告が不安を喚起し、それが注意測定課題遂行に影響した可能性を調べる目的で、(a)の9項目に加えて質問した。項目文は“自己開示過程で見知らぬ学生と会うことに不安を感じていた”というものである。(a)、(c)はともに“(1)全く当てはまらない”から“(7)非常によく当てはまる”の7点尺度で測定した。

TABLE 1 Private self-awareness scale items

1	自分がどんな人間であるのか理解しようとしていた
2	あまり自分については意識していなかった
3	自分をかえりみていた
4	自分がこういう人間であればなあと思っていた
5	自分自身についてあれこれ考えていなかった
6	自分の本当の気持ちに注意が向かっていた
7	いくぶん距離をもって自分自身を見つめている感じがしていた
8	自分の気持ちの変化を感じていた
9	自分の心の動きに気をくばっていた

結 果

抑うつ低群・高群の作成 自己注目あり条件に割り当てられた被験者28名のうち、2名のデータを分析から除外し²、26名のデータが分析の対象となった。そして自己注目あり条件の被験者を SDS 得点の中央値によって2群に分けた。すなわち、SDS 得点が39点以下の者 ($n=13$, $M=35.0$, $SD=3.61$) を抑うつ低・自己注目

あり群, 40点以上の者 ($n=13, M=42.3, SD=2.39$) を抑うつ高・自己注目あり群とした。自己注目のない条件についても同様に, SDS 得点が39点以下の者 ($n=15, M=34.9, SD=3.23$) を抑うつ低・自己注目のない群, 40点以上の者 ($n=10, M=45.2, SD=6.94$) を抑うつ高・自己注目のない群とした。SDS 得点に対し, 抑うつ×自己注目の 2×2 の分散分析を行ったが, 自己注目の主効果及び交互作用効果は共に有意ではなかった。

注意測定課題の遂行 検査10 (42問) の回答数, 正答数及び誤答数が課題に向けた注意の指標となった。抑うつ低・自己注目あり群の被験者1名だけは, 3分間の回答時間に検査10の回答をすべて終えていた。検査10と検査12では問題が違うので, この被験者の回答数としては, 満点の42を計上した。被験者の回答数, 正答数, 誤答数の平均及び標準偏差をTABLE 2に示した。被験者の回答数, 正答数, 誤答数のそれぞれについて, 抑うつ×自己注目の分散分析を行った。その結果, 回答数及び正答数については, ともに交互作用効果のみが有意であった (それぞれ, $F(1.47)=5.44, p<.05$; $F(1.47)=5.54, p<.05$)。さらに, 抑うつ高・自己注目あり群と抑うつ低・自己注目あり群の回答数及び正答数の違いを調べるため, 平均値の差の検定をしたところ, 前者が後者よりも, 回答数, 正答数ともに有意に少なかった (それぞれ, $t(24)=2.42, p<.05$; $t(24)=2.45, p<.05$)。これらの結果から, 抑うつ高・自己注目あり群の被験者が, 抑うつ低・自己注目あり群の被験者に比べて, 注意測定課題に集中していなかったことが考えられ, この結果は仮説1を支持する。また, 誤答数については, 自己注目の主効果のみが有意であり ($F(1.47)=6.12, p<.05$), 自己注目あり条件の被験者は自己注目のない条件の被験者に比べて, 注意測定課題に集中していなかったと考えられる。

TABLE 2 Mean performance by conditions^{a)}

	Self-Focus				No Self-Focus			
	<i>n</i>	Correct	Miss	Total	<i>n</i>	Correct	Miss	Total
Dep ^{b)} High	13	28.46 (3.50)	0.54 (0.78)	29.00 (3.65)	10	31.70 (4.72)	0.10 (0.32)	31.8 (4.71)
Low	13	32.31 (4.44)	0.54 (0.78)	32.85 (4.41)	15	30.13 (3.70)	0.13 (0.35)	30.27 (3.65)

Notes: a) SDs in parentheses.

b) 'Dep' means depression.

事後質問紙(a)私的自覚状態尺度 まず全被験者

($N=51$) の私的自覚状態尺度9項目の α 係数を算出したところ.79であり³, この9項目は内的一貫性を有していた。逆転項目の得点を修正した後, 9項目の全得点を単純合計して私的自覚状態得点とした。各群の私的自覚状態得点の平均と標準偏差をTABLE 3に示した。この得点に対して, 抑うつ×自己注目の分散分析を行った。その結果, 自己注目の主効果が有意であった ($F(1.47)=16.16, p<.001$)。自己注目のない条件の方が, 自己注目あり条件よりも, 注意測定課題遂行中の私的自覚状態が高いという結果は, 一見, 自己注目の操作の有効性に疑問をはさむようなものであったが, このことについては後で述べる。さらに自己注目あり条件の2群について, 平均値の差の検定をしたところ, 抑うつ高・自己注目あり群は抑うつ低・自己注目あり群よりも, 私的自覚状態得点が高かった ($t(24)=2.10, p<.05$)。この結果から, 注意測定課題遂行中に抑うつ高・自己注目あり群は, 抑うつ低・自己注目あり群に比べて, 自己に注目する程度が高かったといえる。これらの結果は仮説2を支持する。

TABLE 3 Mean private self-awareness scale score by conditions^{a)}

	Self-Focus	No Self-Focus
Dep ^{b)} High	20.92 (7.91)	27.20 (8.99)
Low	14.62 (7.40)	26.40 (8.66)

Notes: a) SDs in parentheses.

b) 'Dep' means depression.

事後質問紙(b)注意測定課題遂行中の注意の方向 被験者は, 注意測定課題遂行中に何を考えていたかという問いに自由記述で回答したが, この自由記述を分析することで, 被験者の注意測定課題遂行中の注意の向き方を調べた。注意の向いている対象という点から,

² データ分析から除外した理由は以下の通りである。1人は, 注意測定課題実施中に自己開示実験に備えて, 眼鏡を外しコンタクトレンズにつけ変えていた。そのため課題遂行量が他の被験者に比べて極端に少なかった。もう1人は, 以前に全く別の社会心理学の実験に参加していたため, 実験の意図を見破っていた。なお, 後者の課題遂行量を分析から除外しても結果に影響はなかった。

³ 項目番号4は, 項目一得点間相関が有意ではなく, この項目を除いた8項目の α 係数は.81であった。しかし, この項目を分析から除外しても結果に大差がみられなかったため, ここでは全9項目の分析結果を提示した。

(1) “自己への言及”, (2) “課題解決への言及”, つまり注意測定課題の解決を促進するような記述, (3) “課題解決以外の外的対象への言及” の3つを分類のためのカテゴリーとして設けた。“自己への言及”と判断するのは, 被験者の感情, 身体感覚(疲労, 頭の働き, 空腹など), 動機・欲求, 自己評価などが記述に含まれる場合である。“課題解決への言及”と判断するのは, 注意測定課題への集中, 解決方略, 注意測定課題解決への意気込みなどが含まれる場合である。“課題解決以外の外的対象への言及”と判断するのは, 自己開示実験への言及, 注意集中課題や実験の感想及び意図の推測などが含まれる場合である。(1)~(3)の対象に被験者の注意が向いているか否かを, 自由記述をもとに判断した。よって, (1)~(3)のうち1つにしか注意が向いていないと判断される場合もあれば, 3つ全てに注意が向いていると判断される場合もある。カテゴリーとその分類基準は筆者が作成し, 実験の仮説を全く知らない評定者2名に分類を依頼した。各評定者は独立に, 分析から除外した2名のデータを含めた53名分の自由記述を分析した。Cohen の一致係数 κ を算出したところ, カテゴリー(1)では.92, (2)では.88, (3)では.73, であった。評定者間で分類が一致しなかったもの((1)では2つ, (2)では3つ, (3)では4つ)については, 評定者間で協議して決めた。(1)~(3)の各カテゴリーについて, 自己注目あり・なし条件ごとに, 抑うつ的高低×記述の有無の2×2のクロス表を作成し, それぞれにカイ2乗検定を行った。その結果, 自己注目あり条件での“課題解決への言及”の有無にのみ有意差が見られた($\chi^2(1)=3.94, p<.05$)。“課題解決への言及”についての抑うつ的高低×記述の有無の2×2のクロス表をTABLE 4に示した。抑うつ低・自己注目あり群は抑うつ高・自己注目あり群に比べて, 注意測定課題遂行中に課題解決的なことを考えることが多く, より課題に集中していたといえる。私的自覚状態尺度と自由記述の分析の結果を総合すると, 自己注目なし条件では, 抑うつの高さにより課題遂行中の被験者の注意の向き方に大きな差は見られなかったが, 自己注目あり条件では注意の向き方に差があると考えられる。すなわち, 抑うつ高群は抑うつ低群に比べて, 注意測定課題遂行中に自己に注意を向けやすく(TABLE 3), 課題に集中していなかった(TABLE 4)といえる。

私的自覚状態尺度の結果では, 自己注目なし条件の方が自己注目あり条件よりも私的自覚状態が高いという結果になっていたが, 同様の結果が自由記述の分析からも得られるかどうかを検討した。自己注目の有

無×“自己への言及”の有無の2×2のクロス表を作り, カイ2乗検定を行ったところ, χ^2 値は有意ではなかった($\chi^2(1)=0.86, p>.80$)。この結果から, 自由記述の分析では, 自己注目なし条件の方が自己注目あり条件に比べて, 注意測定課題遂行中に自己に注意を向けやすかったとはいえない。

TABLE 4 Reference to task-solving

	Self-Focus		No Self-Focus	
	Yes	No	Yes	No
Dep ^{a)} High	3	10	4	6
Low	8	5	8	7

Note: a) 'Dep' means depression.

TABLE 5 Reference to self

	Yes	No
Score of PSAS ^{a)}		
High	13	11
Low	6	21

Note: 'PSAS' means private self-awareness scale.

次に, ここで作成した私的自覚状態尺度の妥当性を確認するために, 私的自覚状態得点の高低と自由記述での“自己への言及”の有無との関係を調べた。私的自覚状態得点の中央値により被験者を2分したが, その際, 自己注目あり・なし条件ごとに被験者を2分し, その後2条件のデータを結合した。私的自覚状態得点の高低×“自己への言及”の有無の2×2のクロス表をTABLE 5に示した。このクロス表にカイ2乗検定を行った結果, χ^2 値が有意となり($\chi^2(1)=5.54, p<.05$), 私的自覚状態得点が高い群は低い群に比べて, 自由記述で自己に言及することが有意に多かった。なお, 自己注目あり・なし条件ごとに分析しても同様の傾向が見いだされた(それぞれ, $\chi^2(1)=2.60, p<.11$; $\chi^2(1)=2.93, p<.09$)。この結果は, 私的自覚状態尺度が自己に向けた注意を測定する尺度として妥当であることを示唆している。

事後質問紙(c)自己開示実験予告の効果 見知らぬ学生と会って自己開示するという指示は, 不安を喚起させるかもしれない。とくに, 自己開示実験の予告は抑うつ的な学生に高い不安を喚起し, それが注意測定課題の遂行を妨害したかもしれない。この可能性を検討

するため、自己開示過程で見知らぬ学生と会うことに不安を感じた程度を7点尺度で評定させた。その結果、2つの主効果、及び交互作用効果がいずれも有意ではなかった(all $ps>.1$)。よって自己開示実験の予告が抑うつ高群に高い不安を喚起し、それが注意測定課題の遂行を妨害したという可能性は排除できよう。

考 察

本実験では、自己に向けた注意を課題へ移行する際に、抑うつ者と非抑うつ者との違いがあるかどうかを検討した。自己注目後に集中力を必要とする課題をさせると、抑うつ者は非抑うつ者よりも課題に注意を移すことが難しいため課題遂行が劣るだろうという仮説1については、抑うつ傾向の高い者は抑うつ傾向の低い者に比べて、自己注目後の注意測定課題の遂行量(回答数・正答数)が有意に少なく、この結果は仮説1を支持した。また、自己注目後の課題注目状況で、抑うつ者は非抑うつ者よりも自己に注意を向けている程度が高いだろうという仮説2については、抑うつ傾向の高い者は抑うつ傾向の低い者に比べて、注意測定課題に集中しておらず、注意測定課題の遂行中に自己に注意が向きやすかった。そしてこれらの結果は仮説2を支持した。

つぎに、私的自覚状態尺度で自己注目の操作の有効性に疑問をはさむような結果が出たことについて述べる。すなわち、私的自覚状態尺度で、自己注目なし条件の方が自己注目あり条件よりも私的自覚状態得点が高いという結果を得たが、これはこの尺度に回答するときの被験者の構えに条件間で大きな差があったためであると考えられる。自己注目あり群の被験者は、自己について考えるという作業をしたので、注意測定課題遂行後の質問紙で私的自覚状態尺度項目に回答することの意味を自然に理解できるであろう。一方、自己注目なし群の被験者は事前に自己について考えるという作業をしなかったため、注意測定課題遂行後にそのような質問を受ける意味が理解できず、比較的中庸な答え方をしたのである。実際、7点尺度(1-7)で極端な反応(1または7)をした数は、自己注目あり条件では自己注目あり条件の反応数全体(234)の57.7%(135)であるが、自己注目なし条件では自己注目なし条件の反応数全体(225)の32.4%(73)に過ぎなかった。自己注目なし条件の被験者の大半は、デブリーフィングで自己注目あり条件のことを聞いて、ようやく私的自覚状態についての質問がされた意味を理解していた。

本実験の結果から、Ingram (1990) が述べたように、

抑うつ者は自己に向けた注意を状況に応じて外(本実験の場合注意測定課題)に向けることが難しいということが示唆される。ところで、この自己から環境への注意の移行を困難にしている媒介要因の1つとして否定的なムードが考えられる。ムード導入の手法を使った研究では(e.g. Carr, Teasdale, & Broadbent, 1991; Sedikides, 1992; Wood, Saltzberg, & Goldsamt, 1990), 否定的なムードにより被験者が自己注目したことが見いだされている(但し, Salovey (1992) では肯定的なムードによっても自己注目が生じたという報告がある)。もし、本実験の自己注目の作業で抑うつ者がより強い否定的なムードを経験したならば、この否定的なムードが自己への注目を持続させ、課題への集中を妨げる一因となったかもしれない。抑うつ者においては、自己注目が否定的な感情を生み出し、その否定的な感情が自己注目を維持する原因となる、というような悪循環が働き、抑うつが悪化していくのかもしれない。この悪循環を断ち切るには、自己へ注意を向けられないような介入が必要となるかもしれない(Fennell & Teasdale, 1984)。

引用文献

- Beck, A.T., Ward, C.H., Mendelson, M., Mock, J., & Erbaugh, J. 1961 An inventory for measuring depression. *Archives of General Psychiatry*, 4, 561-571.
- Carr, S.J., Teasdale, J.D., & Broadbent, D. 1991 Effects of induced elated and depressed mood on self-focused attention. *British Journal of Clinical Psychology*, 31, 273-275.
- Ellis, R.J., & Holmes, J.G. 1982 Focus of attention and self-evaluation in social interaction. *Journal of Personality and Social Psychology*, 43, 67-77.
- Fennell, M.J., & Levine, M.P. 1984 Self-attention, concept activation, and the causal self. *Journal of Experimental Social Psychology*, 20, 231-245.
- Fennell, M.J., Scheier, M.F., & Buss, A.H. 1975 Public and private self-consciousness: Assessment and theory. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 43, 522-527.
- Fennell, M.J., & Teasdale, J.D. 1984 Effects of distraction on thinking and affect in depressed patients. *British Journal of Clinical Psychology*, 23, 65-66.

- 福田一彦・小林重彦 1973 自己評価式抑うつ性尺度の研究 精神神経学雑誌, 75, 673—679.
- 古沢厚子・星野命 1962 自己記述にあらわれた自己態度の安定性 国際基督教大学学報 I A 教育研究, 9, 97—124.
- Gibbons, F.X., Smith, T.W., Ingram, R.E., Pearce, K., Brehm, S.S., & Schroeder, D.J. 1985 Self-awareness and self-confrontation : Effects of self-focused attention on members of a clinical population. *Journal of Personality and Social Psychology*, 48, 662—675.
- Ingram, R.E. 1990 Self-focused attention in clinical disorders : Review and a conceptual model. *Psychological Bulletin*, 107, 156—176.
- Ingram, R.E., Lumry, A.E., Cruet, D. & Sieber, W. 1987 Attentional processes in depressive disorders. *Cognitive Therapy & Research*, 11, 351—360.
- Ingram, R.E., & Smith, T.W. 1984 Depression and internal versus external focus of attention. *Cognitive Therapy & Research*, 8, 139—152.
- Kuhn, M.H., & McPartland, T.S. 1954 An empirical investigation of self-attitudes. *American Sociological Review*, 19, 68—76.
- Lewinsohn, P.M., Hoberman, H., Teri, L., & Hautzinger, M. 1985 An integrative theory of depression. In S. Reiss & R. Bootin (Eds.), *Theoretical issues in behavior therapy*. New York : Academic Press. Pp. 331—359.
- Mikulincer, M., Gerber, H., & Weisenberg, M. 1990 Judgment of control and depression : The role of self-esteem threat and self-focused attention. *Cognitive Therapy and Research*, 14, 589—608.
- 押見輝男 1990 「自己の姿への注目」の段階 中村陽吉(編)「自己過程」の社会心理学, 東京大学出版会, Pp. 21—65.
- 押見輝男・渡辺浪二・石川直弘 1986 自己意識尺度の検討 立教大学心理学科研究年報, 28, 1—15.
- Pyszczynski, T., & Greenberg, J. 1987 Self-regulatory perseveration and the depressive self-focusing style : A self-awareness theory of reactive depression. *Psychological Bulletin*, 102, 122—138.
- Pyszczynski, T., Hamilton, J.C., Herring, F.H., & Greenberg, J. 1989 Depression, self-focused attention, and the negative memory bias. *Journal of Personality and Social Psychology*, 57, 351—357.
- Pyszczynski, T., Holt, K., & Greenberg, J. 1987 Depression, self-focused attention, and expectancies for positive and negative future life events for self and others. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 994—1001.
- 坂本真士 1992 抑鬱尺度と自己意識尺度との相関 日本健康心理学会第5回大会発表論文集, 32—33.
- Salovey, P. 1992 Mood-induced self-focused attention. *Journal of Personality and Social Psychology*, 62, 699—707.
- Sedikides, C. 1992 Mood as a determinant of attentional focus. *Cognition and Emotion*, 6, 129—148.
- Smith, T.W., & Greenberg, J. 1981 Depression and self-focused attention. *Motivation and Emotion*, 5, 323—331.
- Smith, T.W., Ingram, R.E., & Roth, D.L. 1985 Self-focused attention and depression : Self-evaluation, affect, and life stress. *Motivation and Emotion*, 9, 381—389.
- Wood, J.V., Saltzberg, J.A., & Goldsamt, L.A. 1990 Does affect induce self-focused attention ? *Journal of Personality and Social Psychology*, 58, 899—908.
- Zung, W.W.K. 1965 A self-rating depression scale. *Archives of General Psychiatry*, 12, 63—70.

謝 辞

本論文の作成にあたり、ご指導頂きました東京大学山口勸助教授、丹野義彦助教授に感謝致します。また、実験の実施に際し協力頂きました釜谷昌生君(東京大学教養学部)、自由記述の分析に際し協力頂きました上淵寿君、富重健一君(いずれも東京大学大学院教育学研究科)に感謝致します。

(1993.6.7受稿, 9.4受理)